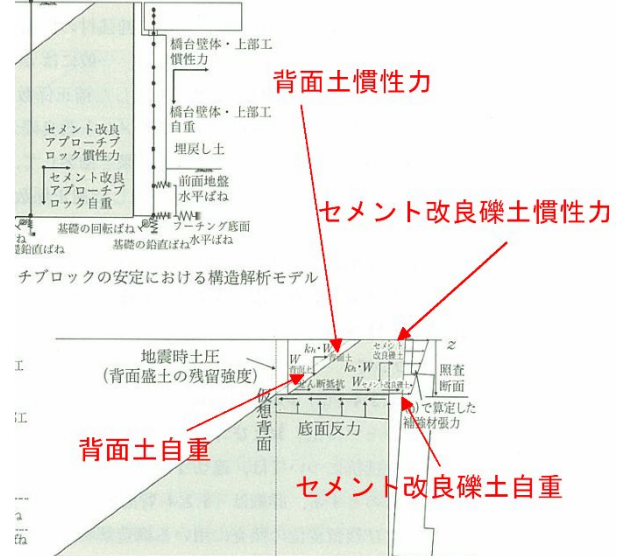
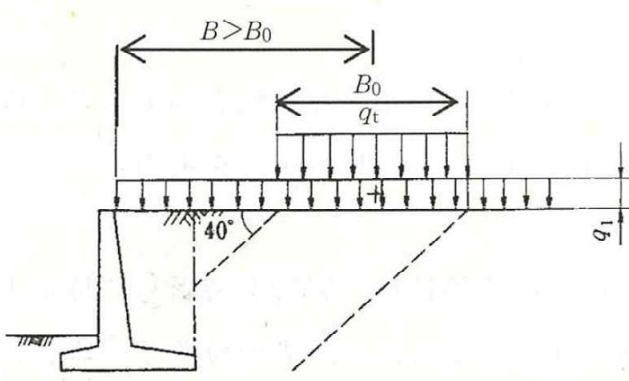
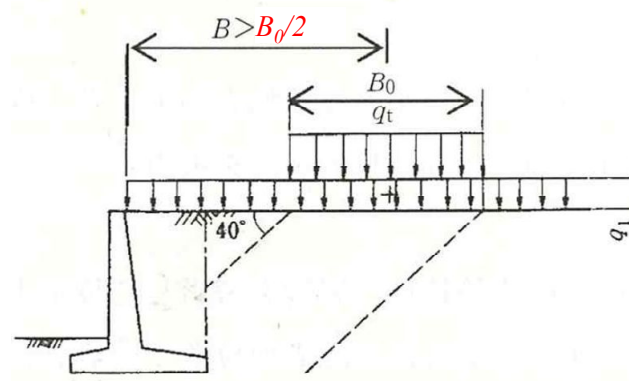
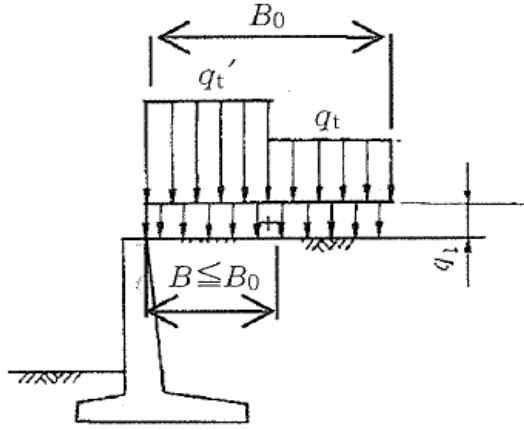
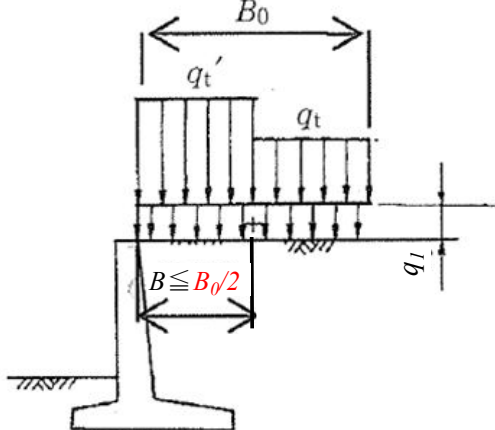


ページ	箇所	現行の記述	修正後の記述
62	上から 12～13 行目	そのため、「5.3 支持地盤」に示した内部摩擦角 ϕ は、……	そのため、「5.4 背面盛土」に示した内部摩擦角 ϕ は、……
111	解説図 7.3.1	図のタイトル:「土留め擁壁の変状例」	図のタイトル:「 抗土圧擁壁 の変状例」
146	解 8.3.4-1	$H_{Rd} = \gamma_{Hi} \cdot P_{fh} + \dots$	$H_{Rd} = \gamma_{H1} \cdot P_{fh} + \dots$
146	解 8.3.4-2	$M_{Rd} = \gamma_{Mi} \cdot M_{pf} + \dots$	$M_{Rd} = \gamma_{M1} \cdot M_{pf} + \dots$
187	解説図 9.1-1	図中の【土のう部(セメント未改良)】	図中の【土のう部(セメント 非 改良)】
227	解説図 9.3.4-1(c)	図面中の【セメント改良礫土】と【背面土】に自重と慣性力の記載なし	図面中の【セメント改良礫土】と【背面土】に自重と慣性力の記載を追加(別途資料参照) 
344	参考文献の 1)	1)地盤工学会:地山補強土工法の適用・評価に関する研究委員会報告書, 2008.3	1)地盤工学会: 地山補強土工法設計・施工マニュアル, 2011.8

※本表は第 1 版に対する正誤表であり、第 2 版以降については修正対応済みである。

ページ	箇所	現行の記述	修正後の記述
45	解説表 3.5.1 (最右列, 上から 2 行目)	壁体の断面力, 曲率, 補強材の破断・伸びひずみ	壁体の断面力, 曲率, 補強材の破断・ <u>引抜け</u> ・伸びひずみ
48	解説表 3.7.1 (最右列, 上から 2 行目)	壁体の曲率	壁体の曲率 <u>補強材の引抜け・破断・伸びひずみ</u>
71	19 行目	また、軌道が擁壁に近接している場合 ($B \leq B_0$) の列車荷重の値は	また、軌道が擁壁に近接している場合 (<u>$B \leq B_0/2$</u>) の列車荷重の値は
71	22 行目 (解 4.4.22)	$q_t' = P / (a \cdot B)$	$q_t' = P / (a \cdot 2B)$
71	解説図 4.4.10		

71	解説図 4.4.11		
93	解説表 5.6.1 (左から2列目, 最上行)	施工時変動作用	<u>変動作用時</u> <u>地震作用(L1地震動)を組み合わせる場合</u> <u>施工時</u>
93	解説表 5.6.1 (左から3列目, 最上行)	地震作用を組み合わせる場合	地震作用 <u>(L2地震動)</u> を組み合わせる場合
121	8行目	$\frac{l_1 + l_2}{H} \leq 0.25$ のとき, $\delta = \phi/2$ とする.	$\frac{l_1 + l_2}{H} \leq 0.5$ のとき, $\delta = \phi/2$ とする.
121	9行目	$0.25 \leq \frac{l_1 + l_2}{H} \leq 0.5$ のとき, $\delta = \phi$ とする.	削除
122	3行目	この際, 土圧の作用面・作用方向, 仮想背面の取扱いは, 地震時以外と同様とする.	この際, 土圧の作用面・作用方向, 仮想背面の取扱いは, 地震時以外と同様とし, <u>仮想背面と壁体との間の背面盛土およびその上の死荷重は擁壁の一部とみなしてよい.</u>

124	8 行目	最大応答時に水平支持力が安定レベル 1 を超える場合は、	初期降伏時に水平支持力が安定レベル 1 を超える場合は、																														
153	解説表 8.3.5-5	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">対 象</th> <th>性能ランク I</th> <th>性能ランク II</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>壁 体</td> <td rowspan="2">損傷レベル</td> <td>1~2</td> <td>2~3</td> </tr> <tr> <td>補強材(ジオテキスタイル)</td> <td>1</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>補強土体・支持地盤</td> <td>変形レベル</td> <td>1~2*</td> <td>2~3</td> </tr> </tbody> </table> <p>* :省力化軌道において、CA モルタルの再注入による復旧性を許容するのであれば変形レベル 3 を設定してもよい。</p>	対 象		性能ランク I	性能ランク II	壁 体	損傷レベル	1~2	2~3	補強材(ジオテキスタイル)	1	1	補強土体・支持地盤	変形レベル	1~2*	2~3	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">対 象</th> <th>性能ランク I</th> <th>性能ランク II</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>壁 体</td> <td rowspan="2">損傷レベル</td> <td>1~2</td> <td>2~3</td> </tr> <tr> <td>補強材(ジオテキスタイル)</td> <td>1^{*1}</td> <td>1^{*1}</td> </tr> <tr> <td>補強土体・支持地盤</td> <td>変形レベル</td> <td>1~2^{*2}</td> <td>2~3</td> </tr> </tbody> </table> <p>* 1:電柱基礎等、局所的に大きな壁頂荷重が作用し、補強材が損傷レベル 1 を満足しない場合には、損傷レベル 2 あるいは 3 を許容してもよい(限界値については補強土橋台に準じる)。</p> <p>* 2:省力化軌道において、CA モルタルの再注入による復旧性を許容するのであれば変形レベル 3 を設定してもよい。</p>	対 象		性能ランク I	性能ランク II	壁 体	損傷レベル	1~2	2~3	補強材(ジオテキスタイル)	1 ^{*1}	1 ^{*1}	補強土体・支持地盤	変形レベル	1~2 ^{*2}	2~3
対 象		性能ランク I	性能ランク II																														
壁 体	損傷レベル	1~2	2~3																														
補強材(ジオテキスタイル)		1	1																														
補強土体・支持地盤	変形レベル	1~2*	2~3																														
対 象		性能ランク I	性能ランク II																														
壁 体	損傷レベル	1~2	2~3																														
補強材(ジオテキスタイル)		1 ^{*1}	1 ^{*1}																														
補強土体・支持地盤	変形レベル	1~2 ^{*2}	2~3																														
195	下から 11 行目	抗土圧橋台に作用する地震時の慣性力は、橋脚と同様に桁、壁体およびフーチングの質量に地震時の応答加速度を乗じて算定する。	抗土圧橋台に作用する地震時の慣性力は、橋脚と同様に桁、壁体(仮想背面と壁体との間の背面盛土およびその上の死荷重を含む)およびフーチングの質量に地震時の応答加速度を乗じて算定する。																														
196	19 行目	ただし、地震時主働土圧に適用する際には、式(解 9.2.3-1)の計算を加速度(震度)に応じて計算する必要がある。	ただし、地震時主働土圧に適用する際には、式(解 9.2.3-1)の計算を加速度(震度)に応じて計算するとともに、 H_2 および M_2 に仮想背面と壁体との間の背面盛土およびその上の死荷重による慣性力の影響も考慮する必要がある。																														

ページ	箇所	現行の記述	修正後の記述
135	8.2.5.8 特殊構造 の抗土圧擁壁 【解説】	<p>【解説】</p> <p>特殊構造の抗土圧擁壁を用いる場合はその特性を考慮し、現場の条件に応じた選定をしなければならない。いずれの形式においても設計上種々の問題が生じる場合があるので十分な検討を要する。</p> <p>例えば、中埋め U 型擁壁の壁体の設計においては、解説図 8.2.5-6 に示すように中埋め盛土の静止土圧を考慮するものとする。側壁に作用する静止土圧は、中埋め盛土の土質性状と締固め程度の影響を考慮して適切に定めることとする。この際、静止土圧係数 K_0 は、解説表 4.4.2 に示す値を用いてよい。</p> <p>床版の設計においては、側壁から伝達される曲げモーメントと軸方向引張力の影響を考慮する必要がある。また、擁壁内部からの排水に対する処置を施しておく必要がある。</p>	<p>【解説】</p> <p>特殊構造の抗土圧擁壁を用いる場合はその特性を考慮し、現場の条件に応じた選定をしなければならない。いずれの形式においても設計上種々の問題が生じる場合があるので十分な検討を要する。</p> <p>例えば、中埋め U 型擁壁の壁体の設計においては、解説図 8.2.5-6 に示すように中埋め盛土の静止土圧を考慮するものとする。側壁に作用する静止土圧は、中埋め盛土の土質性状と締固め程度の影響を考慮して適切に定めることとする。この際、静止土圧係数 K_0 は、解説表 4.4.2 に示す値を用いてよい。</p> <p>床版の設計においては、側壁から伝達される曲げモーメントと軸方向引張力の影響を考慮する必要がある。また、擁壁内部からの排水に対する処置を施しておく必要がある。</p> <p><u>このほか、地下構造物との取付け部に用いられる U 型擁壁については、ボックスカルバートの設計に準じるものとする。</u></p>